

熊本豪雨「人災」の正体

COLUMN
県内
大学発
経世済民

570

川口短大

今年7月、熊本県人吉市を中心に過去前例のないほどの集中豪雨によって発生した「熊本豪雨災害」について、川辺川ダム建設中止による「人災」と発言した経団連副会長と同調する土木工学専門の御用学者に対して、以下に反論を述べる。

■ダムは川と人との付き合い方を一変させる

かつてこの地域には「水害」といふ言葉はなかった。地域住民は過去の経験から、雨の降り方や川の水の上がり方などを見て、どこまで水が上がっていくのかをうまく予想できしていた。



小島 望
ビジネス実務学科教授

■ダムは洪水回避には役立たない

ダムは、治水のためには水を空にする方がよく、利水のためには洪水対策も含めてできるだけ大量の水をためておく方がよい相反する矛盾の塊だ。豪雨が予測される場合は、事前に放流を実施すべきだが、降雨量の予測は非常に困難なうえ、放流もまた一日二日で済む量ではないため、流域のダム同士で治水利水の調整を図られることはほとんどない。利水への配慮が流量調整の判断を狂わせ、洪水対策の足を引っ張っている面は否めない。

結果、実施した市房ダムでさえ決壊寸前、緊急放流寸前であった。そもそも川辺川ダム建設計画の根拠となった1965年の大洪水の原因は、この市房ダムの緊急放流によるものであったのは地元では周知である。

球磨川流域の地域住民が、川辺川ダムは必要ないとの英断を下したのは、「ダムは水害を引き起す」との経験が根底にあり、住民が自らの暮らしを守るために、さらには子孫のためを思つての選択である。一昨年、下流の「荒瀬ダム」が撤去されたのもダムはいらないという流域住民の意思の表れだ。冒頭のような、莫大な税金が投入されるダム事業に群がる財界や官僚、政治家、学者らの発言がまかり通るのであれば、住民の生命や財産を守るための水害対策は永久にできはしない。無責任にダム建設を推進する者たちの存在こそが今回の災害を生み出した「人災」の正体といえよう。

■ダムは水質を確実に悪化させる。球磨川流域ではダムができたに川が濁り、観光や水産資源に壊滅的な打撃を与え続けている。今や星くすのごとく乱舞した魚は姿を消し、ひと夏のアユやウナギ漁で一年間生活がで

きるといわれた豊富な水産資源は激減し、おいしい水もおいしいお酒の象徴である球磨焼酎のイメージも悪化しかねない状況だ。球磨地域の観光は美しい清流あつてこそであり、水を汚すダムはいらないという流域住民の願いは明白だ。

こじま・のぞむ 1971年生まれ。麻布大学獣医学部環境畜産学科卒業、岩手大学大学院連合農学研究所博士課程修了。博士(農学)。現在、川口短期大学ビジネス実務学科教授。保全生態学を専門とし、徹底した現場主義を貫く。近年、四国や九州、東北の中山間地において「川と人との結びつき」に注目した調査研究を行っている。